

フランス第二帝政期における降霊術の流行

Les tables tournantes sous le Second Empire

数森 寛子

KAZUMORI Hiroko

La dernière moitié du XIXe siècle a connu la vogue des tables tournantes. Victor Hugo est un des premiers écrivains à se passionner pour cette pratique. C'est alors que Allan Kardec publie son ouvrage sur le spiritisme, mais Hugo n'est pas son adepte. Son expérience des tables tournantes précède de plusieurs années la naissance du spiritisme français qui va continuer de se propager jusqu'en 1869. À Jersey, où Hugo vient de s'exiler, les séances spirites auxquelles il participe sont assez intenses, mais pour plusieurs raisons, il abandonne cette pratique au bout de deux ans, en 1855. De son côté, Allan Kardec s'efforce de créer une nouvelle science, mais Hugo comprend très vite que cette pratique ne sera jamais un moyen d'accéder à la vérité cachée. Contrairement à l'avis général, ses « poésies spirites » des années 1850s ne sont pas toutes les fruits de ces séances de tables tournantes. Elles ont cependant joué un rôle et l'ont poussé dans ses réflexions sur le surnaturel.

1. 降霊術の流行と聖母の出現

宗教人類学者、関一敏は、著書『聖母の出現—近代フォーク・カトリシズム考』（1993年）の冒頭で、映画『ポルターガイスト』や『エクソシスト』、『ヘルハウス』といったオカルト映画のモデルとなった、アメリカにおいて実際に起こったとされる騒霊事件のエピソードを紹介している。その上で、関氏は、「近代スピリチュアリズムの発生・興隆とほぼ時を同じくして、19世紀フランスでも他界と現世をつなぐ不思議な出来事が起こっていた¹⁾」と指摘し、聖母マリアの出現とその奇蹟に関する考察を展開する端緒としている。

この一連の出来事—聖母出現とその奇蹟—は、地域・宗教・社会において近代スピリチュアリズムと異なった文化的背景をもっている。ふたつの並列からなんらかの方向づけをえるためには、まだいく段階もの作業を必要としている。あえて著者の関心を要約するなら、近代社会における比較他界発生論と名づけておきたい領域である²⁾。

このように関は、アメリカにおける近代スピリチュアリズムの発生と、フランスにおける聖母マリアの出現の同時代性を指摘しながら、この「比較他界発生論」に踏み込むことは、宗教学の専門家によっても未だに難しい問題であることを示唆している。

アメリカでオカルト事件が大きく注目され始めたまさにその時代に、フランスでは、聖母マリアの出現を見たという証言者が現れる。遠く離れた地域で、「他界」への関心が、時を同じくして、人々の注目の的となる。この現象は非常に興味深いものであるが、二つを結びつけて論じることは非常に難しい。しかし、ここに、フランスにおけるスピリチュアリズムの発展、すなわちアラン・カルデックによる「スピリティズム」の提唱と降霊術の大流行という第三の視点を加えることで、この問題にアプローチするための、ひとつの糸口を得ることができないだろうか。もちろん、この視点の導入によって、聖母の出現と、スピリチュアリズムの「発生」をめぐる問いに直接答えることはできない。しかし、なぜスピリティズムが、19世紀においてはアメリカとフランスにおいてのみ発展し、本国アメリカでそれが下火になった後も、フランスにおいては根強く存在し続けたのかを問うことで、聖母マリアの出現による巡礼旅行の大流行と、「他界」にたいする関心の高まりと降霊術実験の大流行という、二つの社会現象がほぼ同時期に起こった要因を探るための手がかりを得ることができないか。そこで、本稿ではまず、第二帝政期のフランスに特有の背景に目を向けてみたいと思う。

2. 「被催眠者 somnambule」の時代

ニコル・エドルマンは、『フランスにおける透視者・治癒者・幻視者 1785-1914』(1995年)の中で、フランスにおいては、アラン・カルデックのスピリティズムが登場する以前から、メスメリズムによる催眠と動物磁気が、文学作品にも取り上げられ、人々の間で広く知られていたことを指摘している³。動物磁気を操る催眠術師によって催眠状態に置かれた人物は、「動物磁氣的被催眠者 somnambule magnétique」と呼ばれていたが、フランス語において、この「被催眠者 somnambule」とは、「夢遊病者 somnambule」と同音異義の言葉であり、この二つの語は、歴史の中で混同され、後に前者は忘れ去られるに至った⁴という。アカデミー・フランセーズの辞書によれば、17世紀に生まれたこの語は、ラテン語の somnus (睡眠 sommeil) と ambulare (歩く marcher) から成るものであり、本来は「夢遊病者」を指していたが、その拡張的用法として「被催眠者」を指示するようになったものである。

ところで、現代的視点からは、オカルト的に見えるこのメスマーによる動物磁気が、エドルマンの指摘によれば、実際は、啓蒙主義思想から生まれたものであり、当時の最新の科学として台頭したものであったという事実を看過することはできない。すなわち、フランスにおいて降霊術が他国に類を見ないほど浸透したのは、非常に早い時期から、催眠術が科学あるいは医療として、知識人たちの間において認識されていたことに起因するのではないかと考えられるのである。1857年に、カルデックによって「スピリティズム spiritisme」という言葉が使用される以前には、テーブル・ターニングにおける催眠状態が、「磁氣的現象 phénomène magnétique」と呼ばれていた⁵ことから、メスメリズムの影響の大きさを窺い知ることができるだろう。その後、50年代の終り頃には、「被催眠者 somnambule」という語は、「霊媒 médium」という語と混ざり合い、「霊媒的被催眠者

somnambule-médium」や「被催眠的霊媒 médium-somnambule」のように合成された語を形成し、1910年頃までには、「霊媒 médium」という語に吸収されるようにして、「被催眠者 somnambule」という語は、完全に消え去った⁶のだという。

ここで、「被催眠者 somnambule」という語に着目したのは、19世紀に書かれたテキストの中にこの語が現れる際には、「被催眠者」と「夢遊病者」という二つの訳が可能であり、そのどちらとして理解するかが、テキスト解釈の根幹に関わる問題となりうることを示すためである。しかし、「夢遊病者」の意味でこの語が使用されている際にも、「被催眠者」の存在が文化的に浸透している時代においては、直接的に指示されるものの裏に、もう一つの意味が常に付随する場合もあるだろう。

催眠によるものではない「夢遊病者」は古くから存在していた。一方で、19世紀後半の時代に流行した降霊術における「被催眠者」とは、現代のいわゆる「霊媒」のような存在であり、異世界からのメッセージを伝達する者である。だが、カルデックによるスピリティズムの創設以前の時代においては、それが医学の対象となる病によるものであるのか、悪魔の仕業であるのか、あるいは悪魔とは別の者によって特別な力が与えられているのか、明確には区別されていなかったのである。その混沌とした状況が、この語の翻訳を非常に難しくしていると言えるだろう。加えて、まさに同時代に、精神医学研究の拠点となった、パリのサルペトリエール病院の医院長、ジャン＝マルタン・シャルコー（1825 - 1895）による神経学の発展があったことを考慮するならば、ますますこの語が示す対象は複雑なものとなる。そして、「被催眠者 somnambule」がほぼ常に女性であったことから、この語は、男性名詞でありながら、多くの場合において、女性名詞につく冠詞とともに使用されていた（la somnambule）ことは、当時のジェンダーを考察する上での貴重な指標ともなるだろう。

3. ユゴーとスピリティズム

ヴィクトル・ユゴーはテーブル・ターニングの実験に没頭したことのある作家として知られている。しかし、ユゴーが、19世紀のヨーロッパで大流行した降霊術の影響を受けた作家の一人であるという認識には注意が必要であり、とりわけ、ユゴーがカルデックのスピリティズムの信奉者であるという理解は間違っている⁷。

ユゴーにおける降霊術実験について、日本語で読むことのできる重要な文献としては、稲垣直樹の『ヴィクトル・ユゴーと降霊術』および『フランス心霊科学考』が挙げられる。稲垣は、ユゴーの手書き原稿の詳細な研究から、ユゴーがテーブルの言葉であると信じていたものは、ユゴー自身の無意識に他ならないことを指摘している。また、降霊術の流行に対する社会学的研究としては、ギョーム・キュシェの『墓の彼方からの声—19世紀におけるテーブル・ターニングと、スピリティズム、社会』が挙げられる。ここではこれらの文献を参考に、ユゴーによる降霊術実験の時期をまとめておく。

ユゴーが最初に降霊術を行った日は、1853年9月11日である。英仏海峡にあるイギリス領ガーンジー島に亡命中のユゴーは、そこで、デルフィーヌ・ド・ジラルダンという女性から、当時、アメリカで流行していた降霊術の実験の手ほどきを受ける。当初、ユゴーは、この実験に懐疑的であったが、数日のうちに、すっかりその実験に熱中するようになったという。この降霊術の実験は、ユゴーの家族

と弟子を中心とするメンバーで行われており、その内容は、『降霊術ノート』としてまとめられている。この記録がユゴーの生前に出版されることはなかった。そして、このノートに記されたユゴーの最後の降霊術の記録は1855年7月2日のものであるという。

すなわち、ユゴーが、降霊術の実験を行ったのは、1853年9月から1855年7月にかけての、およそ2年弱の期間である。注目したいのは、アラン・カルデックが降霊術に初めて参加したのが1855年5月である点である。カルデックという名は、降霊術の中で彼に示されたことをきっかけに使用を始めた、ケルト風のペンネームであり、本名はイポリト＝レオン＝ドゥニザール・リヴァイク(Hippolyte-Léon-Denizard Rivail)である。彼は、『霊の書』(1857年)をはじめとする、降霊術から得た「哲学」をまとめた著書を出版する以前は、カトリック派の新聞『ユニヴェール』の編集者を経験したこともある、教育学者であった。カルデックは、1855年以降になって、パリで流行していた降霊術に関心を向けるようになるのだが、ユゴーはその時代にはすでに、降霊術から手を引いていたのである。

ユゴーが降霊術を行っていたことは1857年から知られていた⁸とされるが、それはユゴーがテーブルの実験を止めてからすでに2年ほど経った時期に当たる。注記しておく、ユゴー自身は、テーブルに対して質問を行う中心人物であり、彼の弟子として知られるオーギュスト・ヴァークリーとともに、その対話の記録を行っていたが、直接テーブルに手を置く「霊媒」は、彼の息子のシャルルの役目だった。新聞がスピリティズムを話題にし始めたのは1859年であり⁹、カルデックのスピリティズムが広まるのは1860年以降である¹⁰。ユゴーが降霊術実験は、流行に乗ったものではなく、流行に先駆けていたものであり、その事実は、リアルタイムでは知られていなかったのである。オーギュスト・ヴァークリーが著書『歴史のかげら』の中でユゴーの降霊術のエピソードに触れたのは1863年のことであるから、ユゴーのテーブル・ターニングが公式に知られるようになるにはおよそ10年が経っていることになる。

4. ユゴーとテーブル・ターニング

ユゴーは降霊術から何を得たのだろうか。キュシェが参照する、クローディス・グリエの『降霊術者ヴィクトル・ユゴー』(1935年)によれば、ユゴーが「降霊術風」の作品を書いた時期は、1854年から少なくとも1859年まで続いたという。1854年というのは、ユゴーの『静観詩集』(1856年)に収められた詩の一部が書かれている時代であり、1859年については、生前に出版されることのなかった、未完の詩集『サタンの終わり』の執筆が行われていた時期にあたる。たしかに、この5年間に書かれた詩には、亡霊や転生といったテーマが多く見られるし、同じく未完の詩集『神』には、ユゴー独自の方法による「神」の探求が見られるのである。

1851年12月のルイ・ナポレオンによるクーデターを激しく非難したユゴーは、国外へ脱出し、ブリュッセルに滞在した後、英国領ジャージー島に身を寄せ、自主的亡命先の地から、『小ナポレオン』(1852年)と『懲罰詩集』(1853年)によって、ナポレオン三世を激しく断罪していた。こうした政治的な作品について、1854年に出版された『静観詩集』は、純粋な叙情詩集であり、そこには宇宙の成り立ちの神秘を語る「闇の口の語ったこと」等の詩も含まれるから、まさにユゴーが降霊術を初めて以来、

作風が大きく変化したかのようにも見える。しかし、それでもなお、降霊術のみにユゴーの詩の源泉を求めるのはやや早計に過ぎるだろう¹¹。

ユゴーは、新しい時代の文学を提唱し、フランスのロマン主義運動を導いた作家であり、政治家でもあった。彼は、教育による、識字率の向上、蒙昧からの脱却、人類の進歩を説くのだが、その反面、実は、非常に迷信家でもあった¹²という。加えて、ユゴーが亡命先に選んだ英仏海峡の島は、小説『海に働く人々』にも描かれるように、様々な言い伝えや迷信が色濃く残る閉鎖的空間でもあった。たとえば、ユゴーはそこで、夜の海辺を彷徨う「白い女性の亡霊」の話を聞いている。そもそも、亡命先の住居を探すにあたり、彼は、海辺に立つ亡霊の出る家の話を聞きつけ、さっそくそれを購入することに決めているのだから、ユゴーは以前より、神秘的な世界に対して強い興味関心をもっていたのである。そして、ユゴーが、テーブル・ターニングに没頭するにいたったのは、最初の実験の際にテーブルに現れたのが、他界した最愛の娘であったと信じたからであったのだ。政治家としての活動に加え、アカデミー・フランセーズ会員への二度の立候補など、パリで多忙な生活を送っていたユゴーであったが、1846年の娘の死後は、10年間、作品を発表することがなかった。そうしたユゴーが、突如として、パリの政界や社交界から身を引き離し、荒涼とした景色に囲まれた島での生活を始めたところに、降霊術がもたらされたのである。

ところで、ユゴーがテーブル・ターニングを止めた理由としては、同席者が精神的な錯乱を起こしたこと、ジャージー島からガンジー島へと移住することになったこと、ユゴーの妻が懐疑的な姿勢を取り続けていたこと等、複数の要因が考えられるのであるが、それに加え、キュシェは、降霊術に対するユゴーの失望を挙げ、「しかし、おそらく彼がこう決定したのは、一つには、彼が期待していたものを、結局のところ、テーブルが与えてはくれなかったという失望によるだろう」と指摘する。ここで、キュシェが目にするユゴーの『降霊術ノート』の中の一節（1854年12月17日）に、本稿でも目を向けてみたい。

私にとって次のようなことが明確になった。すなわち、闇に満ちた私たちの世界と交信することを認める崇高なる世界は、私たちの世界が、そこに押し入るがままにしておくことを望まないものである。たとえ好奇心というものが、神を前にした崇拜であり、無限なるものを前にした尊敬の念であるとしても。この崇高なる世界は、崇高であり続けることを望むのだ。しかし、それは正確なものになることを望んではない、あるいは少なくとも、その厳密さが、私たちには、時として垣間見られる驚くべき影と光の中であって、巨大な、混沌としたものとしてしか映らないことを望んでいるのである。それは私たちの幻視としてあることを望み、科学となることを望みはしないのだ¹³。

求めた答えを得ることのできないユゴーの落胆は、生きた人間の世界と、他界との、超えることの許されない境界の存在に対する、明確な認識へと彼を導いた。アラン・カルデックのスピリティズムは、1857年の『霊の書』出版以来、当時の、最新の科学となることが期待されていた¹⁴。スピリティス

ムは、1869年のカルデックの死まで、フランスにおいて、大きな影響力を持ち続けていたが、ユゴーは、1854年の段階で、それが「科学」とはなり得ないことをすでに見抜いていたのである。

1860年前後には、カトリック教会側からの、スピリティズムに対する攻撃が激しくなるが、ここでは、引用の中で、ユゴーが「神」に言及している点に注目しておきたい。彼自身は、王党派カトリックの詩人として出発していながらも、徐々に自由主義へと接近し、第二共和制期には、共和主義者となっていた。ユゴーは洗礼を受けておらず、キリスト教に対する信仰をもってはいなかったが、とりわけ第二共和制期には、政治の場において、教権擁護派と呼ばれていたカトリック陣営との対立を深めていった。そして、クーデターを起こしたルイ・ナポレオンが、1852年12月に皇帝として即位したことを、翌年、カトリック教会が正式に認めたため、彼とカトリックとの断絶は決定的なものとなっていたのである¹⁵。一方で、ユゴーは、自らが「神」を信じていることを明言し続けている。彼は、生涯を通じて、キリスト教とは一定の距離を取りながらも、「神」に対する強い信仰をもちつづけた作家であると言えるだろう。先の引用は、「神」と降霊術によって垣間見られる「他界」とが両立している、希少な例ではないだろうか。このことは、フランスにおける精神世界の探求において、常に、聖書の再解釈が試みられてきた事実を分析するための、一つの手がかりとなるだろう。

おわりに

本稿では、ヴィクトル・ユゴーによるテーブル・ターニングが、アラン・カルデックによるスピリティズムの流行に先駆けるものであることを指摘し、ユゴーによる「降霊術」の試みが、カルデックによる影響下にはないことを示した。カルデックが最初にテーブル・ターニングに参加したのは1855年であるが、パリでテーブル・ターニングが大流行したのは、1853年末のことであり、ユゴーはそれよりも数ヶ月早く、この実験を開始していたのである。テーブル・ターニングが、ユゴーの作品に対して及ぼした影響については、より深い考察を必要とするが、ユゴーの神秘学的思想の源泉をそこに求めるよりは、むしろ、もう一つの「崇高なる世界」との交信の不可能性を確認したユゴーが、超自然的なものに対する思索を深めていくための重要な契機として、この経験を理解することにより、新たな研究の視野を開くことができるのではないだろうか。

同時代に起こっていたもう一つの現象、聖母マリアの出現については、ユゴーの作品の中には明確な記述が見つからない。しかし、『レ・ミゼラブル』の一節には、遠巻きながら、ユゴーによるこの現象への目配せを見て取ることができるかもしれない。少女コゼットを母親から預かった、貪欲な宿屋の主人テナルディエについての記述を引用しておきたい。

彼(テナルディエ)は何にも成功しなかった。この偉大なる才能にしかるべき舞台が与えられなかったからだ。もし財産が全くない者でも破産できるとするならば、テナルディエはモンフェルメイユで破産しかかっていた。スイスカ、ピレネー地方であれば、この一文無しも大富豪になっていたかもしれない。だが、運命が彼に宿屋を開かせたこの土地では、家畜が草をはむように貧しい生活を送るのが精一杯だった¹⁶。

モンフェルメイユという田舎町で宿屋の経営に失敗していたテナルディエであるが、著者は、スイスカピレネーであれば事情は違っていただろうという。ピレネー地方といえば、19世紀後半の時代に、聖母マリアの出現と、教会によるその奇蹟の承認によって、巡礼旅行の大流行を見た町、ルルドがある地方である。作家ゾラや、ユイスマンスが描くルルド巡礼もまた、ユゴーと同様に、驚異に対する作家の強い関心と落胆に彩られている。第二帝政期に特有の、スピリティズムとカトリシズムの対立を軸として、新興の「科学」と伝統宗教の新たな展開を考察していくことで、この二つの異なる領域における、精神世界に対する人々の関心の急激な高まり、その同時性について、より分析を深めることができるのではないだろうか。

註

- ¹ 関一敏『聖母の出現—近代フォーク・カトリシズム考』、日本エディタースクール出版部、東京、1993年、p. 25.
- ² *Ibid.*, p. 25.
- ³ Nicole Edelman, *Voyants, guérisseuses et visionnaires en France. 1785-1914*, Albin Michel, Paris, 1995, pp. 7-9.
- ⁴ *Ibid.*
- ⁵ Guillaume Cuchet, *Les Voix d'outre-tombe : Tables tournantes, spiritisme et société au XIXe siècle*, « L'univers historique », Le Seuil, Paris, 2012, p. 21.
- ⁶ Nicole Edelman, *op.cit.*, p. 9.
- ⁷ 例えば、2023年11月現在、フランス語のウィキペディアの「アラン・カルデック」の項目には、ユゴーが、カルデックの影響を受けた作家として挙げられている。他にも、こうした指摘はインターネット上の情報に散見される。
- ⁸ Paul Auguez, *Les Manifestations des esprits*, Dentu, Paris, 1857, p. 88, note 1. Cité par G. Cuchet, *op. cit.*, p. 116.
- ⁹ Guillaume Cuchet, *op. cit.*, p. 175.
- ¹⁰ *Ibid.*
- ¹¹ これについては、より丁寧な分析が必要となるが、ここでは、現代においても、ユゴーの作品に対する「降霊術」の影響を認めるか否かは、研究者によって、見解の分かれる問題であることだけを言い添えておきたい。
- ¹² Cf. Henri Guillemin, *Victor Hugo par lui-même*, Le Seuil, Paris, 2002.
- ¹³ Victor Hugo, *Le Livre des Tables : Les séances spirites de Jersey*, Édition de Patrice Bovin, [Troisième chaire], Dimanche 17 Décembre 1854, « Folio classique », Gallimard, Paris, 2014, p. 494.
- ¹⁴ Cf. 稲垣直樹『フランス〈心霊科学〉考—宗教と科学のフロンティア』、人文書院、東京、2007年。
- ¹⁵ ユゴーと宗教、「神」の問題については、拙論を参照。「フランス第二共和政期における「教育の自由」をめぐる議論—ヴィクトル・ユゴーによるファルー法反対演説(1)」、『愛知県立芸術大学紀要』(第44号、2014年、pp. 19-33.)。「詩人が「神」になる時—ヴィクトル・ユゴー」、宇野重規・伊達聖伸・高山裕二(編著)『共和国か宗教か、それとも—十九世紀フランスの光と闇』(白水社、東京、2015年、pp. 187-223.)。「フランス第二共和政期における「教育の自由」をめぐる議論—ヴィクトル・ユゴーによるファルー法反対演説(2)」、『愛知県立芸術大学紀要』(第50号、2020年、pp. 3-14.)。
- ¹⁶ Victor Hugo, *Les Misérables*, II, III, 2, vol. Roman II, « Bouquins », Robert Laffont, Paris, 1985, p. 302. 引用は拙訳。『レ・ミゼラブル』の草稿の中には、1846年から1848年の間に執筆された頁もあるが、引用部は、1860年から1861年3月までの間に書かれたものである。Cf. « Chronologie de la rédaction », *ibid.*, p. 1220-1248.

参考文献

作品

- Victor Hugo, *Les Misérables*, II, III, 2, vol. Roman II, « Bouquins », Robert Laffont, Paris, 1985.
- *Promontorium Somnii, Œuvres complètes*, vol. Critique, « Bouquins », Robert Laffont, Paris, 1985.
- *Le livre des Tables, Les séances spirites de Jersey*, édité par Patrice Bovin, « Folio classique », Gallimard, Paris, 2014.
- J.-K. Huysmans, *La Cathédrale, Œuvres complètes*, Tome 9, 1905-1907, Classique Garnier, Paris, 2020.
- (出口裕弘訳『大伽藍』、世界異端の文学II、桃源社、1966年。*抄訳のため、ラ・サレットとルルドをめぐる記述の部分は、本書には含まれていない。)
- *Les foules de Lourdes : Précédé de Le drageoir aux épines ou L'intime souffrance de Joris-Karl Huysmans*, Jérôme Million, Paris, 2013.
- *La Haut ou Notre-Dame de la Salette*, Castermans, Paris, 1965.
- Emile Zola, *Lourdes*, édité par Jacques Nioray, « Folio classique », Gallimard, Paris, 1995.

研究

稲垣直樹『ヴィクトル・ユゴーと降霊術』、水声社、東京、1993年。

—『フランス〈心霊科学〉考—宗教と科学のフロンティア』、人文書院、東京、2007年。

岩渕邦子「〈マリア時代〉のユイスマンス」、『愛知教育大研究報告』、54(人文・社会科学編)、pp. 53-61、2005年。

数森寛子「フランス第二共和政期における「教育の自由」をめぐる議論—ヴィクトル・ユゴーによるファルー法反対演説(1)」、『愛知県立芸術大学紀要』、第44号、2014年、pp. 19-33。

—「詩人が「神」になる時—ヴィクトル・ユゴー」、宇野重規・伊達聖伸・高山裕二(編著)『共和国か宗教か、それとも—十九世紀フランスの光と闇』、白水社、東京、2015年、pp. 187-223。

—「フランス第二共和政期における「教育の自由」をめぐる議論—ヴィクトル・ユゴーによるファルー法反対演説(2)」、『愛知県立芸術大学紀要』、第50号、2020年、pp. 3-14。

関一敏『聖母の出現—近代フォーク・カトリシズム考』、日本エディタースクール出版部、東京、1993年。

Auguez (Paul), *Les Manifestations des esprits*, Dentu, Paris, 1857.

Baldick (Robert), *La vie de J. K. Huysmans*, Denoël, Paris, 1975. (ロバート・バルディック著、岡谷公二訳『ユイスマンス伝』、学習研究社、東京、1996年。)

Boucher (Gustave), *Une séance de spiritisme chez Huysmans*, Niort, 1908.

Cuchet (Guillaume), *Les Voix d'outre-tombe : Tables tournantes, spiritisme et société au XIXe siècle*, « L'univers historique », Le Seuil, Paris, 2012.

Edelman (Nicole), *Voyants, guérisseuses et visionnaires en France. 1785-1914*, Albin Michel, Paris, 1995.

Gaudon (Jean), « Hugo et le surnaturalisme », dans *Le Surnaturalisme français*, La Baconnière, Neuchâtel, 1979.

—(dir.), *Ce que disent les tables parlantes, Victor Hugo à Jersey*, J.-J. Pauvert, Paris, 1964.

Grillet (Claudius), *Victor Hugo spirite*, Desclée de Brouwer, Paris, 1935.

Guillemin (Henri), *Victor Hugo par lui-même*, Collections Microcosme, « Écrivains de toujours », Le Seuil, Paris, 1951 ; rééd. 2002.

Vacquerie (Auguste), *Les Miettes de l'histoire*, Pagnerre, Paris, 1863.

執筆者

数森 寛子(美術学部教養教育 准教授)